

令和 4 年 5 月 18 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12497

研究課題名（和文）幕府奥右筆の分析による近世国家権力構造の研究

研究課題名（英文）A study of the structure of power in the early modern period by the analysis of the Okuyuhitsu

研究代表者

荒木 裕行（Araki, Hiroyuki）

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：70431799

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は江戸幕府の政治運営における奥右筆の政治的地位を明らかにし、そこから幕府の権力構造の解明を進めていくことを目指した。奥右筆の職掌を研究する中で、幕藩間をつなぐ存在であった取次や藩・旗本が老中に働きかける場である老中対客について、報告を行い、江戸幕府政治構造の分析には藩側の視点からの検討が必要であることを強く認識した。さらに従来は知られていなかった史料（「袂婦具路」「関東伺向御下志」）を収集し、奥右筆の職掌の実態を分析している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は江戸幕府の政治構造を具体的に解明することを課題としている。江戸幕府は300年近い期間、安定した政治構造を維持することに成功した政権である。かつては江戸幕府の支配は軍事的・強圧的な力を用いて民衆を抑圧していたと理解されていたが、近年では社会の要求に柔軟に答えることに成功していたことが解明されている。

本研究の意義は、江戸時代の日本を構成していた政治組織である藩の要求に幕府がどのように対応していたのかを、具体的な政治過程や政治交渉を通して解明した点である。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to clarify the political position of the Oku-Yuhitsu in the political management of the Edo Shogunate, and to advance the elucidation of the power structure of the Shogunate. I made a research report on "Toritugi", which connects the shogunate and the clan, and "Roju-taikyaku", which is the act of the clan and Hatamoto negotiating with Roju. I made it clear that the analysis of the political structure of the Edo Shogunate requires consideration from the perspective of the clan.

In addition, I have obtained historical materials that were not known in the past, and have clarified the actual situation of the duties of Oku-Yuhitsu from the analysis.

研究分野：日本近世史

キーワード：奥右筆 御用頼 取次 老中対客 幕藩関係

1. 研究開始当初の背景

奥右筆は、江戸幕府の実務官僚の一つであり、老中や若年寄の下で書類の整理や作成を行った役職である。人数は30名程度で組頭2名が置かれた。政策立案にあたっての関連資料の調査や政策案の作成に携わっていたため、幕政の運営に参画し、大きな権限を持っていたとされ、「江戸幕府の政務運営の実態を明らかにするためには、奥右筆の検討なしには成り立たない」(藤田覚「武家官位の「価格」」『近世政治史と天皇』、吉川弘文館、1999年)と評価されている。ただし、従来は奥右筆を中心に取り上げた研究は少なく、本間修平「徳川幕府奥右筆の史的考察」(『法と権力の史的考察』、創文社、1977年)、藤田覚「近世幕政文書の史料学的考察」(『近世史料論の世界』、校倉書房、2012年)があげられる程度であった。近年では山本英貴氏が奥右筆に着目した研究を行っているが(「江戸幕府の政務処理と幕藩関係」『史学雑誌』第126編第6号)、依然として奥右筆の研究は、その重要性と比して遅れている。

2. 研究の目的

前述の学術的背景をふまえ、本研究では、奥右筆の江戸幕府における政治的位置づけを明らかにし、奥右筆を中心とした幕府権力構造の実態解明を行う。本研究では、奥右筆の職掌や活動を分析することによって、幕府の政治運営における奥右筆の政治的地位をあきらかにし、そこから幕府の権力構造の解明を進めていく。江戸幕府の政治構造や政策の変化を研究する場合には、將軍や老中など政権のトップごとに時期区分するのが一般的である。しかし実際には奥右筆が政策の決定に強く関与し、幕府政治を事実上リードしていた時期も多かったのではないかと予想している。この仮説を実証したい。

3. 研究の方法

江戸幕府奥右筆の職掌を分析し、そこから江戸幕府の政治構造を解明するため、江戸幕府奥右筆に係る日記などを調査・収集・分析した。具体的に調査・収集・分析した史料は下記の通りである。

- ・「弘前藩庁日記」のうち「江戸藩邸日記」「国日記」(弘前市立弘前図書館所蔵)の延宝8年(1680)～9年・宝永6年(1709)・享保1年(1716)～2年・5年・15年・延享3年(1750)・明和2年(1765)～3年・天保10年(1839)～15年・嘉永6年(1853)。
- ・「水野家文書」(東京都立大学附属図書館所蔵)のうち、「松平能登守乗賢日記」・「松平右近将監武元日記」など19世紀を中心とする老中日記、「自分雑記」・「内願筋公用人共取次候矩則増山弾正少弼尋候二付答書」「中務殿公用人不念之取計いたし候一件書付」
- ・「山名家文書」(東京都江戸川区郷土資料室所蔵)
- ・遠山家領主日記(苗木遠山資料館所蔵)

また下記の関係史料(古文書原本)が古書店にて販売されたため、これを購入し、調査・分析した。

- ・「袂婦具路」: 18世紀に作成されたと推定される史料。江戸幕府の役人である目付の職掌に関わる事項をまとめたもの。目付は奥右筆とともに幕府の中核部分をなす実務官僚である。
- ・「関東伺向御下志」: 19世紀に作成されたと推定される史料。全国の諸藩からの問い合わせ、それに対する回答などを編纂したもの。幕府の政策判断を示す史料であり、また作成に奥右筆が関係していた可能性も想定される。
- ・「関東伺向御下志」: 18世紀末頃に作成されたと推定される史料。大名が就任する幕府役職の一つである奏者番の留役を務めた者が作成した公文書などの編纂記録。奏者番は江戸城内での儀礼を司るとともに老中への登竜門の一つであり、奥右筆の職掌とも関連が大きい。また幕府政治の中核の一部を占める役職でもある。

4. 研究成果

(1) 報告

下記の研究会・学会において報告を行った。

- (A)「幕藩関係における老中対客の意義」(国際歴史文化研究会第7回合宿、2018年8月)
- (B)「幕藩間交渉における非制度的関係の位置づけ」(2019年度歴史学研究会大会近世史部会「政治交渉ルートからみる近世中後期の幕藩関係」2019年5月)

(A)は、江戸の老中役宅を大名・旗本が訪問し、そこで願書の提出・自己の売り込みなどを行う「老中対客」を分析したものである。老中対客はこれまで存在は知られていたが、分析したのは本報告が初めてである。老中ごとの老中対客人数の違いなどを分析したが、従来の理解とは異なり、老中ごとの差はあまり確認できなかった。老中対客には奥右筆など幕府役人の関与は確認できず、その一方で幕府から見ると陪臣である老中家臣は大きく関与していたことが明らか

になった。今後の幕藩関係・幕府政治構造研究の基礎的な前提となる研究成果である。本報告を行った「国際歴史文化研究会」は日本史だけではなく東洋史など多様な分野の専門家が出席しているため、様々な視点からの指摘を受けることができた。

(B)では(A)の報告での結果を踏まえ、老中対客の分析をさらに進めた。それに加え、17世紀終盤の将軍代替わり(徳川家綱から綱吉へ)の時期の取次についても分析を行った。幕藩間を内々につなぐ存在であった取次は、綱吉の将軍就任に伴って規制され、幕藩間の私的なつながりは縮小したというのが、従来の同時期の幕藩関係についての理解であったが、それは間違いであり、私的なつながりに変化はなかったことを明らかにした。さらに幕府役人の職掌について従来の理解は一面的なものにとどまっていることを解明し、今後、実態に即した幕府役人の理解を目指した研究が必要となることを指摘した。本報告については、「幕藩間交渉における非制度的関係の位置づけ」(『歴史学研究』989号)において、文章化している。また堀新氏より「2019年度歴史学研究会大会報告批判」(『歴史学研究』989号)にて、本報告へのコメントなどを受けているが、それについては現時点では対応できていない。

なお、(A)・(B)での報告を通じて、本研究の大きな目的である江戸幕府政治構造の分析には藩側からの視点からの検討が必要であることを、従来よりも強く意識するようになったため、本研究の研究方法を研究開始時点から少し変更し、藩から幕府への働きかけに関わる史料の収集・分析に若干力点を移している。

(2) 研究終了時点で残されている課題

研究開始当初には存在を確認しておらず、研究期間中に収集した「袂婦具路」「関東伺向御下志」「関東伺向御下志」などについては、読解・分析中であり、研究終了時点では明確な成果を出すには至っていない。これらの史料の研究成果については、本研究の期間が終了した後にも分析を続ける予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 荒木裕行	4. 巻 850
2. 論文標題 書評と紹介 藤本仁文著『將軍権力と近世国家』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 95頁・97頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒木裕行	4. 巻 989
2. 論文標題 幕藩間交渉における非制度的関係の位置づけ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 96頁・103頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 荒木裕行
2. 発表標題 幕藩間交渉における非制度的関係の位置づけ
3. 学会等名 2019年度歴史学研究会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒木裕行
2. 発表標題 幕藩関係における老中对客の意義
3. 学会等名 国際歴史文化研究会第7回合宿
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 日本古文書学会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 176
3. 書名 古文書への招待	

1. 著者名 福田 千鶴、藤實 久美子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 488
3. 書名 近世日記の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------